

情報通信審議会 情報通信技術分科会 I T U部会 (第 15 回) 議事録 (案)

1 日 時

令和 2 年 1 月 30 日 (木) 14 時 00 分～15 時 18 分

2 場 所

総務省共用会議室 1 (10 階)

3 出席者

(1) 委員 (50 音順(敬称略))

相田 仁 (部会長)、伊丹 誠

(2) 専門委員 (50 音順(敬称略))

今井 朝子、梶原 ゆみ子、門脇 直人、川口 忠久、児玉 圭司、古賀 正章、
芹沢 昌宏、武田 幸子、西岡 誠治、橋本 明、藤本 正代、前田 洋一

(3) 総務省

巻口国際戦略局長、二宮審議官、柴崎総務課長

(総合通信基盤局)

深堀国際周波数政策室長

(4) 事務局

山口通信規格課長、萩本国際情報分析官 他

4 議事

(1) 2019 年無線通信総会 (RA-19) の結果について

(2) 2019 年世界無線通信会議 (WRC-19) の結果について

(3) 2020 年世界電気通信標準化総会 (WTSA-20) について

(4) その他

開 会

○相田部会長 定刻となりましたので、第15回情報通信審議会情報通信技術分科会ITU部会を始めさせていただきます。

まず1月期の定期改選におきまして、当部会の専門委員が2名変更となりましたので、ご紹介させていただきます。

宇佐見専門委員のご後任として、KDDI株式会社技術企画本部標準化推進室長の古賀専門委員、それから、佐藤専門委員のご後任といたしまして、電波産業会理事、西岡専門委員にご着任いただきました。どうぞよろしくお願いたします。

○西岡専門委員 よろしくお願いたします。

○相田部会長 本日の議題は、議事次第にございますとおり(1)2019年無線通信総会(RA-19)の結果について、(2)2019年世界無線通信会議(WRC-19)の結果について、(3)2020年世界電気通信標準化総会(WTSA-20)について、(4)その他の4点となっております。

議 事

(1)2019年無線通信総会(RA-19)の結果について

○相田部会長 議題1、2019年無線通信総会(RA-19)の結果について、資料につきまして事務局からご説明をお願いたします。

○萩本国際情報分析官 資料15-3を御覧願います。RA-19結果についてでございます。

表紙をめくっていただきまして、1ページ目の上段に概要を記載しております。

RAは、ITUの無線通信部門の総会でありまして、通常3年から4年に一度開催されております。この総会が、昨年、2019年10月21日から25日の5日間、エジプトのシャルム・エル・シェイクというところで開催されました。2019年に開催されたRAですので、以下、RA-19と呼ばせてもらいます。このRA-19には、世界88カ

国から511名が参加し、我が国からは、審議官の二宮を団長にしまして、36名が参加いたしました。議題としましては、勧告案の承認、決議案の承認、次期研究会期の研究課題案の承認、そして研究委員会、SG等の各委員会の議長・副議長の任命となっております。

下段に移りまして、SGからの提出された勧告案の承認についてでございます。ITU-Rの勧告につきましては、前研究会期におきまして新規、改訂合わせて192件の勧告が承認されております。そして、SGで合意に至らなかった5件が、今般のこのRA-19で審議されました。この5件のうち、新規が2件、改訂が3件ございます。そして、これらが全て承認されてございます。承認された勧告の例としまして、新規と改訂を1件ずつご紹介させていただきます。

新規といたしましては、落水者救助等に使用される自律型海上無線機器（AMRD）というものの定義、技術特性、運用特性を定めた勧告でございます。従来、船舶の航行管理に用いられておりますAIS（自動船舶識別装置）を人に適用したものでございます。今般RA-19の後に開催されました世界無線通信会議、WRC-19におきまして、使用周波数についても合意されてございます。

そして、改訂勧告のほうでございます。こちらの勧告は、IMTの周波数配置に関する勧告になります。IMTは、2000年代の3G、第3世代移動通信システムからグローバルな周波数が特定されてございます。今回の改訂では、2015年のWRC-15で特定されましたIMTの周波数、いわゆる5Gの周波数の現行化、アップデートを行うことを主とする改訂となっております。他方で、IMTシステムにつきましては、日本を含めて地域利用される周波数もございますので、今回の改訂に合わせまして、地域利用の周波数もIMT周波数と同様にRR（無線通信規則）の遵守が必要、すなわちIMTと同様の保護基準の遵守が必要とする日本からの意見も取り込まれる形で改訂が行われております。

続いて2ページ目をお願いいたします。RA-19に提出されました決議案の承認についてでございます。2件の新規決議、23件の改訂決議、3件の決議の削除が承認されました。例としまして、新規決議2件を記載しております。いずれも放送に関する決議となっております。

1つ目が、将来の放送の進展に向けた基本的考え方に関する決議です。国際的に協調した放送サービスの技術仕様が策定されるように、新しいシステム等の勧告や報告を促す

決議になってございます。

2つ目は、テレビ・音声・マルチメディア放送の進展における無線通信セクターの役割に関する決議になっております。放送サービスが高度化する中、無線通信セクターにとどまらず、関係セクターや関係機関との連携を促す決議になっております。

それから、削除された決議については、用語や定義の準備に関する指針、その手続事務に関するものなどで、作業が終了したり他の決議に吸収されたりする形で当該決議が削除になっております。

続きまして、下段のほうをお願いします。次期研究会期における研究課題の承認です。各SGでは、合計204件の課題が承認されまして、例示しておりますのが、IMTの高度化に関する研究課題、そして、高度没入型映像音響システムに関する研究課題の2つを例示させております。これは、5ページ、6ページにも参考資料をつけさせていただいておりますので、そちらを御覧願います。

まず、5ページのほうですけど、IMTの高度化に関する研究課題になっております。2つ目の丸にございますとおり、IMTとしましては、5Gの技術要件が検討されました2000年にこの課題が設置されました。そして、4つ目の丸にございますとおり、次期研究会期では、IMT-2020、いわゆる5Gの無線インターフェースの技術勧告化が大きな取り組みになるというものでございます。

6ページのほうをお願いします。こちらは、高度没入型映像音響システムの研究課題になってございます。こちらが継続課題になります。日本などが2017年に提案して設定されております。VR/AR・360度映像などのコンテンツ制作・交換のために必要となるパラメーター、視聴条件、評価方法などの研究が行われておりまして、次期研究会期では、これに3D映像を対象に追加して検討が進められるものでございます。

最後になりますが、各SGの議長・副議長の任命についてでございます。恐縮ですが、3ページのほうに戻っていただきます。

要職者については、資質、地域バランス、ジェンダーバランスが論点になりまして任命されております。日本からは、推薦していた放送業務のSG6の議長としてNHKの西田様、それから、地上業務のSG5の副議長としてNTTドコモの新様。この2人は、いずれも継続の2期目になります。そして、衛星業務のSG4の副議長といたしまして、新たにスカパーJSATの河野様。これら3名全員が今回のRA-19によって任命されるという結果になってございます。

以上がRA-19の結果についてでございます。

○相田部会長　　ありがとうございました。

それでは、ただいまの事務局からご説明につきまして、何かご質問、ご意見等ございますでしょうか。よろしゅうございますでしょうか。

(2) 2019年世界無線通信会議(WRC-19)の結果について

○相田部会長　　それでは、次の議題、2019年世界無線通信会議(WRC-19)の結果につきまして、こちらも事務局からご説明をお願いいたします。

○深堀国際周波数政策室長　　それでは、資料15-4に基づきまして、WRC-19の結果についてご説明させていただきます。

1 ページ目を御覧ください。有限希少な資源である電波を各国が公平かつ合理的に利用できるようにするとともに、国境を越える電波がほかの国の無線局に有害な混信を与えないことを確保するためには、電波が国際的なルールに沿って利用されることが重要となります。このため、国連の専門機関であるITU、国際電気通信連合で、電波を利用する際の国際的なルールとして無線通信規則、Radio Regulations が定められておりまして、各国では、この無線通信規則に基づいて電波を利用することが求められています。世界無線通信会議、WRCですが、無線通信規則の改訂を行うために開催されている会合となります。

2 ページ目を御覧ください。ITUの組織におけるWRCの位置付けですが、先ほどご紹介ありましたRAとともに、3つのセクターのうちの無線通信部門、ITU-Rの重要な会合として3年から4年ごとに開催されております。

3 ページ目を御覧ください。WRCに向けたプロセスですが、WRCの議題は、その前の回のWRCで決定することとされておりまして、今回のWRC-19の議題につきましても、前回、2015年に開催されたWRC-15において議論、合意されました。前回、WRC-15で議題が決定した後、ITUでは、各議題について、それぞれ担当の研究委員会などで検討が行われておりまして、WRCの議論のベースとなるCPMレポートが作成されております。また、アジア・太平洋地域におきましては、APTで計5回のWRCに向けた準備会合が開催されまして、アジア・太平洋地域としての意見やAPT共同提案の取りまとめが行われてきました。

4 ページを御覧ください。この背景といたしまして、特にWRCにおきましては、各国から提出される単独の提案よりも地域からの共同提案の方がより重視される傾向があり、地域機関の果たす役割が大きなものとなっております。このため、アジア・太平洋地域のみならず、ほかの各地域、米州、欧州、旧ソ連、アラブ、アフリカなどにおいても、それぞれ地域単位で準備会合を開催して、地域としての見解や共同提案を取りまとめて提出するという流れになっております。

5 ページ目を御覧ください。続きまして、今回のWRC-19の結果の概要についてご説明させていただきます。WRC-19ですが、2019年10月28日から11月22日にかけてエジプトのシャルム・エル・シェイクにおいて開催されました。世界の163カ国から約3,300名が参加しまして、我が国からは総務省、民間事業者、研究機関などから約90名が参加しております。このWRC-19では、非常に多くの議題が議論されましたが、その中から主だったものをご紹介します。と思います。

まず、5G、IMT用の周波数につきまして、今回WRCでは、24.25から86ギガヘルツという非常に高い帯域を対象に、IMT特定に関する検討が行われました。これらの検討対象帯域のうち、いくつかの帯域については、多くの地域がIMTへの特定を支持しており、IMT特定自体は、会合期間中の早い段階で合意されましたが、近接する帯域を利用している地球観測衛星の保護条件などについて、議論が大変紛糾しまして、最後まで調整が難航いたしました。結果としましては、我が国につきましては、この図にありますオレンジ色の部分、合計15.75ギガヘルツの帯域が新たにIMT用の周波数として合意されまして、これらのうち、26.6から27ギガヘルツ及び39.5から43.5ギガヘルツについて、情報通信審議会において次回の割り当てに向けた検討を進めていく予定です。

続きまして、6 ページ目を御覧ください。航空・海上分野における新たな衛星通信サービスに関しまして、17.7から19.7、そして27.5から29.5ギガヘルツを新たに移動する地球局、Earth Station in Motion——ESIMと呼ばれておりますけれども——で利用するための検討が行われました。我が国としましては、この27.5から29.5ギガヘルツの一部を既に5Gに割り当てております。このため、WRC-19では、5Gなどの地上業務の保護を求める日本や韓国と、ESIMを推進している欧州や中国などの中で意見が対立しましたが、議論の結果、5Gを保護するためにESIMは認められた領土内でのみ運用可能とすることや、ESIM地球局の出力の制限値などを規定する新

しい決議が合意されました。

続きまして、船舶関係につきまして、現在、船舶同士、また船舶と沿岸局との通信に広く利用されているVHFデータ交換システム(VDES)というものがございますが、これを地上のみでなく、衛星でも利用可能とするための新たな周波数分配に関する検討が行われました。日本としては、既存の地上局に影響のない範囲でこの周波数分配が行われるように、地上局の保護を前提とした周波数プランをAPTの共同提案として入力しまして、議論の結果、日本が提案した周波数プランを軸とした案で衛星への新規分配は合意されました。

また、鉄道無線システムで利用する周波数につきまして、各国で異なる帯域をばらばらに利用するのではなく、できる限りグローバル、または地域でハーモナイズした形で周波数を利用することを目指したWRCの決議が合意されました。

また、ITS(高度道路交通システム)につきましても、同様にできる限りグローバル、または地域的にハーモナイズした形での周波数利用を促進するためのWRC勧告が合意されました。

7ページ目を御覧ください。これまで無線通信で利用されていなかった275から450ギガヘルツを対象に、これらを新たに能動業務で利用可能とするための検討が行われまして、一部の帯域を除いて、これらの帯域を新たに陸上移動業務及び固定業務で利用できるようになりました。

また、5ギガヘルツを利用する無線LANを含む無線アクセスシステムに関しまして、特に5,150から5,250メガヘルツにおける無線LANの屋外利用に関する検討が行われました。我が国をはじめ多くの国では、既に本帯域を屋外でも利用可能としており、現状を無線通信規則に反映することを目指していた一方で、衛星のフィーダリンクへの影響を懸念する国が難色を示しまして調整が難航いたしました。最終的には、日本国内の規則条件を反映した形で無線通信規則の改正が合意されました。

また、次回WRCの議題についても議論が行われまして、2023年に開催予定の次回WRC-23の議題として、IMT基地局としての高高度プラットフォームの活用やIMT用周波数のさらなる拡大などが合意されました。

最後に、8ページ目に今回WRC-19の議題一覧、そして9ページ目に、今回WRC-19で決定した2023年に開催予定の次回WRC-23の議題一覧を掲載しておりますので、ご参照いただければと思います。

以上でございます。

○相田部会長　　ありがとうございました。

それでは、ただいまご説明いただきましたWRC-19の結果につきまして、ご質問等ございましたらお願いしたいと思います。

今回RAとWRCがバック・ツー・バックでやられて、次回も同じ2023年に開かれるということは、同じような形態になるかなというふうに思うんですけど、これはもう今後大体こういうふうにするということで定着したと思ってよろしいのでしょうか。

○深堀国際周波数政策室長　　ありがとうございます。

これまでの例を見てみましても、ずっとRAとWRCをバック・ツー・バックで同じ場所で開催するということが慣例になっているようですので、おそらく2023年の次回も同じような形で開催されるのではないかと思います。

○相田部会長　　これまで別々の年にやったことって1回もなかったんですけど。あつたような気がしなくもないんですけど。

○橋本専門委員　　1980年代にはありました。90年以降は今お答えがあったとおりです。

○相田部会長　　そうですか。どうもありがとうございます。

ほかにいかがでございましょうか。先ほどのRAのほうについてでも結構ですけども。よろしゅうございますか。

(3) 2020年世界電気通信標準化総会（WTSA-20）について

○相田部会長　　それでは、次の議題、2020年世界電気通信標準化総会（WTSA-20）についてにまいりたいと思います。

本年11月にITUの電気通信標準化部門、ITU-Tの総会であるWTSA-20が開催される予定でございますけれども、現時点での議論状況や取り組みにつきまして、事務局から報告を頂くとともに、ITU-Tの最近の動向やトピックにつきまして、サポーターでいらっしゃいますWTSA-20 APT準備会合の議長でもいらっしゃいます前田洋一専門委員からご紹介いただきたいと思います。

まずは、事務局のほうからお願いいたします。

○山口通信規格課長　　資料15-5を御覧ください。

1 ページおめくりいただいて、先ほどITUの無線通信分野の総会の話でございましたが、今度は、ITUの中でネットワーク分野の標準化を行っている電気通信標準化部門（ITU-T）の総会でございます。これは4年に1度開催されるというもので、前はチュニジアで、2016年に開催されておりました、今回は、今年の11月にインドのハイデラバードで開催を予定してございます。

WTS A-20における主な議題も先ほどのRAと同様でございますが、2つ目のポツから4つ目のポツと同様に、議長・副議長の任命、それから次会期の研究課題の承認、決議案、勧告案の承認ということがございますが、これに加えて、今ITU-Tの局長を中心に検討を進めていますが、研究体制の次会期の議論もこちらに入ってくるというふうに考えております。

別紙のほうで、今のITU-Tの局長が考察しているSG構成の見直し案についてのご紹介をしたいと思います。研究体制の話は、実はWTS A-16、2016年にも議論をされたんですけども、最終的には、資料の4ページの参考1に添付の、現状の11のSGとTSAGのまま前回の議論は維持されて終わっております。引き続き今回もWTS A-20に向けて再度議論すべく、ITU-Tの局長が、まず2月にTSAG会合というものがございますが、SG関係の横断的な議論をまた多く議論する会合でございますが、この会合に向けて局長の考察ということで、SG組織の再編を提示しているものでございます。背景のところ、ITU-T局長が考えている背景が書かれておまして、標準化の展望が大きく変化してきているということと、そういった変化に適応する必要があること。それから、SGでの成果物の運用としての効率化とか運用効率有効性の向上をさせていくこと、他組織との連携を強化させていくというような視点から、再編の議論を提案したというものであるということでございます。

具体的な提案内容につきましては、現在のSGの役割や構成は基礎としつつ、さらにWorking Partyと言われているSGの下で具体的に作業する部会、こういったWorking Partyは維持しつつ、新しいSGに再配置していくという、そういう考え方で再編になっていまして、こちらに書いてあるSGのギリシャ数字のIからVIまでの形での再編案を提案してきているというものでございます。例示としてでございますが。

こちらのSG Iは、先ほどの4ページもちょっと見ていただきながら御覧いただければと思いますけれども、SG IとIIは、SG 16、これが今こちらに書いてあるマルチメディア、IPTVの関係を扱っていたり、あるいはコーディング、画像圧縮技術、マルチ

メディアの符号化とか、それからアプリケーションの関係を扱っているところがございますが、これを2つに分離して、コーディングの関係はSG9のケーブルテレビの関係と一緒にしてはどうかと。それから、アプリケーションの関係は、SG20でスマートシティだとかIoTをやっている、アプリケーションに近い部分をやっているので、SG20と一緒にしてはどうかという案になってございます。それから、SGⅢのほうは、現状のSG11と13という、プロトコルだとか将来ネットワークの関係を扱っているSG、これを親和性も近いということで一緒にしてはどうかと。それからSGⅣにつきましては、現状のSG2、これは運用管理のマネージングの議論をやっているSGと、あるいは料金関係をやっているSG3、これはポリシーマターになるので、こういったものをあわせたらどうかという感じでございます。それから1個飛ばして、SGⅥは、SG15をそのまま現状維持という案になっていまして、こちらは、現在も光伝送網のトランスポート層を扱っているものでございますけれども、そういった伝送路の課題については、単独でそのまま現状を維持してはどうかと。それから、ちょっと上に上がっていただいて、SGⅤ、こちらは横断的なSGということで、SG5と12と17、セキュリティだとか、それからサービス品質だとか、あるいは電磁波環境だという横断的なSGをひとまとめにしてはどうかという案が出てくるということでございます。

これは、まずはITU-T局長のほうで検討がされている案が初めて今度TSAGという2月にございます会合で提案をされて議論が進んでいくということでございまして、対応状況のところを御覧いただければと思いますが、まず、国内のSGの議長・副議長をやっていらっしゃる方々、それからTSAG関係者ともまず意見交換をさせていただいております。現状では、まず、こういった提案に対して留意が必要な事項、それから明確にしておいたほうがいい事項を日本寄書として次回のTSAG会合に提出するというところで、もう既にシステム委員会のご審議を得て提出させていただいているものでございます。具体的にどういったことを入れているかといいますと、まず、各SG内でこういった構成の検討がされるということで、そういった検討結果もしっかりと尊重・考慮されるべきであるということを入れております。それから、現状SGの活動にはフォーカスグループというものも入ってございますので、こういったフォーカスグループが次のSGではどのSGでリードされるのかを明確にしてほしいということ、それからあと、本再編で事務局運営上解決されること、したいことというのが、例えばここに書いてあるスタッフ数の制限なのか、会議の設備による制約が解決するのかとか、あるいは運営予算の関係を

効率化するのかなど、不明確な内容をしっかりと確認したいという意向の寄書を今回入力しているというものでございます。対応状況としては、今このような状況でございますが、引き続きこういった見直しの議論、大きな話なのでしっかりと対処してまいりたい、状況把握しながら対処してまいりたいと思っております。

それから、その次のページ、今後のスケジュールでございます。先ほどの研究体制の話も含めてございますが、WTSA、これは11月、右上に黒三角が書いてございますが、ここに向けて各SG会合がどんどん開催されまして、次期会期の研究課題、あるいはWTSAで議論すべき決議であるとか勧告などがまとまっていく状況でございます。あわせて、APTでも、先ほどWRCでもございましたけれども、WTSA向けに準備会合を開催する予定でございます。

こちら、最後のページ、5ページを御覧いただければと思います。WTSA-20に向けてAPT準備会合ということで、これを今年の6月に東京で開催をさせていただいてございまして、ここで設置をされてございます。全体会合とそれからワーキンググループが3つ設置されてございまして、本日この後ご紹介いただきますが、前田委員、全体会議の議長をしていただいております。それから、ワーキンググループの議長・副議長に、日本からも3名、任についていただいておりますので、こういったAPTの取りまとめをしていくような議長・副議長をしっかりと押さえながら、日本としても対応をしていきたいというふうに思っております。次回、APTの準備会合でございますが、4月、タイで予定しています。その後も、中国、フィリピンで、東京を入れると計4回なんですけれども、残り3回、WTSAまでに会合を開催していくということでございます。

戻っていただいて、今後のスケジュール、3ページのところでございます。こういったAPTの会合を3回、それから、国内の対応につきましては、電気通信システム委員会、それからITU部会、本会合でございますが、また、WTSA-20の対処につきましては、ご答申をいただきながら対応してまいりたいと思っておりますので、引き続きよろしくお願ひしたいということでございます。

私のほうからは以上でございまして、引き続きITUのトピックを、せつかくの機会でするので、前田委員のほうからご紹介いただければと思っております。

○相田部会長　　では、前田専門委員、よろしくお願ひいたします。

○前田専門委員　　TTCの前田でございます。今日はお時間いただきましてどうもありがとうございます。

WTSAに向けた概要については、今、山口課長のご説明もございましたので、その中でどんな話題、トピックが議論になるかということについて、情報提供という意味でのご紹介をさせていただきたいと思えます。それで、目次に書きましたけども、WTSAに向けて、ITU-Tの現状というのがどうなっているかというのを簡単に共有させていただいて、今後の対応に当たっての対処方針、今後、ITU部会を含めてご検討いただくことになろうかと思えますけれども、トピックという観点から、委員の皆様方を含めて今後の対処に関連するご助言等をいただければなというのを目的にちょっと用意させていただきました。

まず、3ページ目ですけども、今回の研究会期、2017年に始まって今年末までということになっておりますけども、ここに示しましたSmart ABCというのは、2017年、会期の初めにITU-T局長が挙げたある意味スローガンのようなもので、テレコミュニケーションという課題を扱ってきました今までのITU-Tではございますけども、ここで挙げられた主要課題というのが、AというのはAIですね、人工知能。Bがバンキング、いわゆる金融関係を含めたビジネス、そしてCがスマートシティとかコミュニティと言われておりますCを意味しております、まさにIoTとかICTの技術をフルに使って世の中を革新的に変更させていくのに寄与するというで、いわゆるテレコミュニケーションの一部だという認識ではございますけども、こういった新しい方向にこの会期、今進みつつあるというまず前提がございます。

もう一つ、4ページになりますけども、ITU-Tの議論の仕方というのが、絵の中では一番左にスタディグループ、研究委員会という、課題が明確に与えられて、その中で標準ドキュメントを策定するといったものを目的としたスタディグループという検討に加えまして、真ん中に赤で示しておりますけども、先ほどご説明もございましたが、フォーカスグループという、新規の課題を始めるに当たって、標準化で扱うべき課題というのはどういうものがあるかといった標準化の準備検討を行う位置づけのフォーカスグループという作業方式がITU-Tの中では定義されておまして、2000年から運用されておりますが、近年になりまして、フォーカスグループの活用というのが非常に活発になっておまして、スタディグループの活動を拡大、充実化するという意味で重要な機能を果たしていると認識しております。このフォーカスグループは、迅速にスタディグループレベルで設立を合意できますのと、ITU-Tの会員でない非会員の参加を可能にしているということで、幅広い世の中の情報を集めた上で将来方向を議論するという仕掛け

だというふうにご説明しておきたいと思います。

もう一個、ほかにITU-Tの実際の標準化活動の状況というものを分析するに当たりまして、いろいろな統計分析といったものを総務省さんからの受託等の一部の中でTTCでは行っておりますけども、その中の代表的なデータとしまして、国別のITU-Tの全SGに向けた寄書の提案数と参加者数の2019年分のデータを示したのが5ページになります。この中で、寄書数、出席者数ともに中国が断トツの1位を占めているという現状、さらに出席者に関しては、アフリカとか新興国の参加といったものが目立ってきておりまして、新興国含めてこういった新しい技術動向について非常に高い関心を持って、そういった情報を交換する場としてITU-Tが位置づけを持ちつつあるというふう考えられると思います。

もう一つ新しいITUの動きといたしましては、6ページに示しましたが、ITU-Tの会員が2017年以降、順調に増加しております。ただメンバーが増えているだけではなくて、その参加企業の背景を調べますと、今までの通信という領域からはやはり大きく広がった新規分野をバックグラウンドに持つ企業が増えておりまして、例えばオーバー・ザ・トップと言われるようなOTTのサービス事業者とか、保険企業、あとは金融、フィンテックに基づくようなビジネス、あとは自動車、量子といったような、この絵にも示しますような新規の企業が参入しながら、彼らは新しい課題と一緒にITUに持ってきているというのが最近の動向になります。

参考までに、18年、19年度の正規のメンバーと、準メンバーというのはアソシエイトメンバーと申しまして、11個のスタディグループの中で1個だけのスタディグループに参加できる資格を持つのを準メンバーと申しますけども、ロゴで示しておりますけども、こういった各企業のバックグラウンドを調べますと、かなりグローバルにマーケットシェアを大きく占めている各分野でも代表的な企業というのがITUに今参加しているというのも新しい動向かと思っております。

このように、ITU自体がこの4年間でも大きく変わりつつあるということですが、では、現状どのような議論がホットトピックとなっていますかということで、これも先ほどの山口課長のご説明の中にもありましたけども、現状の今会期でのSGの構成は10ページに示しておりますので、それぞれのスタディグループが扱うキーワードは赤字でマークしておりますけども、こういった課題について、ITU-T局長は年に1度ほどITU-T活動の紹介といったような場がございますので、そういった資料から参考に、ITU-

Tで11個の大きな課題、広い課題がございますけれども、この中で業界含めてホットトピックと言われるものがどういうものかといったときにまとめて使っている資料が11ページの1枚になっておりまして、幾つかは、伝統的なITU-Tの強みとなる課題を示しておりまして、通信品質とか電磁環境適合性とか、光を中心とした伝送技術、こういったものに加えまして、先ほどの新規メンバーでも触れましたけれども、オーバー・ザ・トップのサービスにかかわるポリシーも含めた議論とか、昨今話題の5Gの移動網を支えるネットワーク側の課題、そして、量子暗号、あと大きな評価の代表で示しますのが、4K、8Kの映像伝送のために必須の圧縮技術である映像符号化で、H.265というのがございますけれども、これがいわゆるアメリカ、テレビ業界のある意味アカデミー賞みたいなものでエミー賞というのがございまして、これを2度目の受賞をしたということをよくアピールしております。1度目は、H.264という1個前の世代の符号化ですけど、こういうのに加えて、IoT、スマートシティといったような課題は、これらは次期会期においても現状のスタディグループの枠の中で引き続き重要課題として扱われる課題と言えるかと思えます。

これに加えて、新しい課題ということで、先ほどもフォーカスグループとか新規メンバーの増加ということに触れましたけれども、12ページには、2017年以降設立されたフォーカスグループ、10個のタイトルとその技術課題であるキーワード、そしてそのグループの進行のマネジメントを扱っている議長といった情報をリストしておりますけれども、ITUに加わった新規企業というのは、会員が新規の課題を開拓するためにフォーカスグループの設立を提案する、さらにはそのマネジメントにも寄与するというような形で、新規課題開拓にフォーカスグループを非常に積極的に活用しているということが言えるかと思えます。こういったフォーカスグループのアウトプットというのは、いずれ関連するスタディグループのほうに展開されて、標準化に移動するというのがプランになっておりますし、本格的な標準化の必要な場、課題として認知されますと、これは次会期、ここで挙げたフォーカスグループの課題をどこのスタディグループで検討するかということが必要になってきます。

ここでは詳細はご説明いたしませんけれども、27ページ以降の参考資料のところにも、これもITU-Tの中で年次活動報告や何かが行われる資料から編集したものの参考情報を付録につけておりますけれども、参考資料1のほうは、先ほど述べました各SGが現状取り組んでおります標準化のホットトピックと言われるものを10個前後ですけども、

ポンチ絵的にご紹介しております。

参考資料の2のほうは、10個ありますフォーカスグループの主な活動状況なり成果ポイントといったものを図的に簡単にご紹介したものがございますので、それを参考資料2として添付させていただきましたので、ご参考にしていただければと思います。

次のページの13ページになりますけども、これらの新規課題に加えて、ITU-Tでの標準化課題の優先課題というものと産業界のニーズといったものを整合させることが必要であるというのがITU-T局長の強い思いでございまして、ITU-T局長は、定期的に民間企業のCTOの皆様に声をかけて、定期的に意見交換をするCTO会議とかCxO会議といったものを開催して、業界のニーズを集める、そこから将来の標準化課題を抽出するということをしております。昨年の6月には、TTCでもCTO会議のホストをさせていただきましたけども、そういったCTO会議を通じて、少し技術の高いレベルから課題提案がされておまして、セキュリティとか今後インフラネットワークをいかに共有していくかというような観点、あとは、モバイルを支える上で光ファイバのフロントホールとかバックホール含めた位置づけが極めて重要になるというような指摘、さらには、ネットワークオペレーションでの機械学習の適用とかオープンソース、こういったような視点も業界リーダーから提案されておまして、こういった課題を考慮した新規課題といったものが考慮されるものと考えられます。

加えまして、14ページにあります最近では非常にポピュラーになりましたSDGsに関しましても、ITU自体は、SDGsを実現にするに当たりまして、ネットワークでつながることがソリューションにとって必須であるということで、ITUはICTによるSDGs達成に貢献するというのでプロジェクトも立てておりますし、我々としても、標準化課題とSDGsのゴールとの関係といったものを明確にする観点で貢献していく必要があると思っております。

最後に3章ということになりますけども、これはもう先ほど山口課長の説明とオーバーラップするところがありますので簡易にしたいと思いますけども、このタイミングで、WTSAにおいて次期4年間の研究計画とその重要な役職者を決めるということで、日本としてもこの機会を非常にいいチャンスと捉えまして、将来ネットワークビジョンとか先進技術課題の対応において日本の提案、考え方、戦略を反映するよう、積極的に取り組めたらいいなというふうに思っている次第です。特に、これもご紹介がございましたけども、ITUのSGの再編といったことが今回、種まきもございまして、議論になります。

そして先ほどご紹介したようなホットトピックと言われる課題の中でのAIとかIoT、次世代網、さらには量子といった、こういった重要課題をどういった体制で議論するのが望ましいのかを含めて、日本からの提案というものを求められると考えております。

3.2は、これはご説明がありましたのでもう触れませんが、局長の再編提案に対して日本としても今回寄書を用意して対処するというので、17ページ、18ページについてご説明は避けたいと思います。

19ページも同じことになりますので、具体的に日本も寄書提案で行いますけども、これはきっかけでございまして、今後、9月のTSAG、そして先ほどご紹介もありましたWTSAの準備会合をAPTの中で行う会合が今後さらに3回ございますので、こういった場を通じて日本等の提案といったものを皆様方とご検討していきたいと思っております。

20ページは補足資料でございますけども、再編をするに当たって考慮すべき事項として、ITU-T局長の資料の中から挙げられている一つではございますけども、イノベーションをどう捉えるかということで1つが、Innovation by ICTsということで、それによって新しくもたらされますサービスとか、そういったものをネットワークとしてどういう課題として捉えるかという視点と、innovation of ICTsということで、技術そのものを含めてソフトウェア化とかAIとかクラウド化含めた、そういったものに関連した標準化課題といったものを考慮した体制が要するというのが背景にあると考えております。

そのほかの重要課題として挙げられるものをこの後のスライドで3点ほど挙げておりますけども、21ページでは、将来網に関してということで、この課題は中国が非常に熱心ではございまして、フォーカスグループではNET2030というビジョンでの検討で、将来ネットワークに向けた検討課題の抽出といったことを行っております。それに合わせまして、中国の企業からは新IPネットワークといったような、より具体的なソリューションといったものの検討の必要性などの提案がございまして、ITUを日本としてもグローバルな将来ビジョンの共有の場というふうにご利用することと、非常にこういった新しい技術に関心を今示しております新興国と先進国との間のブリッジのできる場という形でのITUの活用というのも考えているかと思っております。

もう一つの課題が次のページで、AIになりまして、2017年以降毎年5月にITUはジュネーブで国連とも連携して、AI for Good Global Summit というものを3年間開催しておりますので、この5月にも4回目が計画されておりますけども、AIというものはや

は非常に幅広い、社会にインパクトがある大きな課題も持っているということで、いかに安全で倫理的な手法でAIを活用するかに当たっては、非常にグローバルな情報共有をする連携の体制が必要だということが今唱えられておりました、AI Commons というようなイニシアチブも立ちあがりつつあるんですけども、日本の参加者がなかなか少なく、こういった動向については注視していくというふうに思いますし、AIの新規課題への対応も必須かと思えます。

最後に挙げた課題としては量子通信ということで、この課題は、2018年以降、標準化が急速に活発化いたしまして、この立ち上げに対して、日本からはNICTに加えましてNEC、東芝、こういったメンバーが、既に国内で検討が進んでおります東京QKDというネットワークのテストベッドでの成果を反映した形で、この1年タイムリーな対応をされていまして、昨年10月末になりますけども、最初の量子暗号に関する勧告としてY.3800というのがこういった日本のキーメンバーの貢献も含めて達成されたという成果が上がっております。ただ、ITUの場合には、QKDに限らないもう少し幅広い形で量子課題を扱うべきということで、QIT、Quantum Information Technology for Network という新規の取り組みをすべきということでフォーカスグループが立ちあがっております、こういったフォーカスグループの動きも踏まえて、次会期への体制にどう反映するかといった対応も非常に重要になるかというふうに思っております。

以上が、WISAで議論される際のテクニカルなレベルのトピックといったものをご紹介しました。25ページにはまとめということで、標準化の背景、ITU-Tの最近の動向と課題がいろいろ広がりつつあるということをご説明させていただきました。最後に、今後の日本の対処ということでは、今回のWISAをチャンスとしてITU-Tでの標準化戦略及び新体制に対して、日本がいかにそこに優位に貢献できるかという観点からの寄与をしていく必要があるというふうに思っている次第でございます。

今後ともいろいろアドバイス、ご支援等いただければと思ひまして、以上でご紹介を終えたいと思います。ありがとうございました。

○相田部会長 どうもありがとうございました。

それでは、ただいまの事務局及び前田専門委員からのご説明につきまして、ご質問、コメント等ございましたらお願いしたいと思います。

どうぞ。

○今井専門委員 新しい方向性のご説明ありがとうございました。自由が丘学園の今井と

申します。

私は現在、Society 5.0に耐え得る教育のインフラを整えるために、学校の中の情報通信関係のインフラをつくっているんですけども、使えるサービスというのがグーグルが一番使いやすく、マイクロソフトといったように海外ばかりで、日本のものがなかったということにかなりショックを受けまして、教育という切り口で、日本はどういうふうに情報通信ネットワークをデザインしていくかということがありましたら教えてください。今、現在どういう状況になっているかといいますと、まだ今皆さん、情報通信ネットワークをうまく使う方法を模索中なんですけれども、子供たちの提出物とかディスカッションのベースがLANになっていて、Wi-Fiを引いたところでデータ提出もグーグルアプリなどで電子データで提出して、提出物もクラウドの中に保存する、テレビ会議システムを使って外ともディスカッションをやっけていき、そろそろAI、VR、ARとも入ってくると思います。そういう状況を鑑みて、教育という視点でどのような方向性を打ち出していられるか、決まっておりましたら教えてください。

- 相田部会長　これは事務局、前田専門委員どちらが？
- 山口通信規格課長　まず教育の情報化という意味では、環境整備のほうを文部科学省中心に我々総務省も協力しながらやっている段階だと思いますが、それで、現場でどういう形で利用されているかという視点は、私も十分に把握ができていないので、もし今日ご参加の企業の方々に現場の状況などおわかりになる方がいらっしゃればちょっと補足いただければと思っております。
- 相田部会長　SDGsあたりでここら辺の課題、話題とかいうのはないんですか。
- 前田専門委員　今のITU-Tの中に e-education というようなキーワードの中身そのものをどうするかということがアプリケーションの一つですので、それに特化した扱いというのは、まだ課題として設定はされていないと思います。ただし、そういった課題を引き取るスタディグループ、土台はできておまして、ITU-Tの中でいくと、SG 16というところがマルチメディアアプリケーションのシステムで、教育の現場で、手段として何が必要かといったときに、電子黒板だとか電話会議だとか遠隔からのモニタリングとか、そういう手段についての開発というのが、目的は e-health でもあり e-education でもありますけども、それを砕いたような形での技術ソリューションを考えているスタディグループ16というのが1つと、もう一つは、IoTスマートシティコミュニティを扱うSG 20というところが、まさにその教育とか社会を、コミュニティをいか

に今より向上させるかという視点でいろいろな国からの提案がございまして、そういった中に必ず教育というのは入っております、このI o Tスマートシティの実現の課題として、SG 20の中の課題にそういった適した課題の議論の場があるというふうに認識しております。

○今井専門委員　ありがとうございます。

基本的にはいろいろな技術、要素技術の議論というのが多いわけですが、結局それをブーストして改善していくためには、サービスとしてどれだけ使えるかというところが非常に鍵になってきているように思いました、今回いろいろアプリケーションとかサービスを検討してまして。そういうふうの一つずつの技術だけでは勝てない、サービスとして人間が使う環境の中で要素技術がどういう形で使われているかというところを見ないと勝てない状態になってきているのではないかなと強く思いましたので、その辺の情報も今後よろしくお願いします。

○相田部会長　いわゆる教育の情報化ということをメインにしている場としては、ここ以外にもオープン・エデュケーション・リソース関係ですとか幾つかあるのに対して、やっぱりITU-Tは、広い意味での通信における標準化というところなので、そういうほかでやっているような教育の情報化って、やっぱりこういうところの互換性がぜひとも要るよねというところになるとこちに回ってくるんだと思うんですけど、まだ今この場でないところでやられているという、そういうような感じなんじゃないかなというふうに思いますけれど。

○前田専門委員　ただ、先ほども言いましたように、SG 20でやっているI o Tを活用したスマートシティの実現という中には、例えばドバイとかシンガポールとか、新規開拓を面的にやろうとする中に、通信だけではなくてサービスの側面、水道から電力から教育、e-health含めてどういうビジョンを描いて、何が標準化対象なのかというのは議論が始まっておりまして、ただなかなか技術中心の参加メンバーでそういう課題を扱うのがあまり得意でないという意味で、日本からの参加はこれからもっと増やしていかなければいけないという状況がございまして。

○相田部会長　ほかにかがでございましょうか。

○古賀専門委員　ちょっとこの場をかりて1つお礼をしたいと思います。資料15-5の資料の3ページ目で、ITU-Tというところの真ん中あたり、上に5と書いてある5月のところの下にSG 9というのがありまして、この会合は日本で行うということが最

近決まりました。このSG9は、次の4ページ目を見ますと、これはケーブルテレビをやっているところですけど、KDDIの宮地というものが議長をさせていただいてまして、この会議を日本でホストをするということで、日本としてしっかりSG9を盛り上げているという、そういう意義がありまして、こういう話が出たときに、総務省の方々、あとTTCの前田さん、ほんとう前向きに、これは乗るべきだと。先ほど山口さんのほうから説明がありましたけど、再編とか、そういうのがあったときにこのSG9というところがちゃんと主導権を持てるようにという、そういう配慮をさせていただいたということで、そういううまく、さすが日本の中も動いていращやるところで、私としてもKDDIとしても非常に感謝をしておりますということを一言述べさせていただきました。

あともう一個、SG9、ここに三角で入っている予定というのは、これは日程が決まっているものだけが入ってまして、9月にもアフリカのガンビアというところで、ケーブルテレビってやっぱり途上国はなかなか光引けなかったりするんで、ケーブル使ってブロードバンドとか、そういうところで盛り上がったとかしているところがあって、そういうのを最後の最後までやって、SG9としてちゃんと成果を出してWTS A-20に臨むという、そういうことでしっかり頑張っていきたいと思っています。

ということで、ほんとうにご支援いただいていることを深く感謝しております。

○相田部会長　ほかにいかがでございましょうか。

では、まず梶原専門委員から。

○梶原専門委員　よろしいですか。ご説明ありがとうございました。

再編の話ということと、今後、注目すべき動向というお話がありましたけれども、この今後注目すべきビヨンド5Gというのか、6Gというのかの話ですとか、AIですとか量子って非常にこれからホットになってくると思うのですが、その新しい動きのものとSGの再編というものの関係性が、再編した後にもどんどんSGが追加されていくものなのか、SGの枠の中に入れていくものなのか、どう理解をしたらいいのか教えていただければと思います。

○相田部会長　では、前田専門委員、よろしくをお願いします。

○前田専門委員　これは基本的にITUの場合は、各国からの提案に基づいての議論ですので、規則的には変更は可能です。ただ、今回再編が提案されている背景には、この12年間、大きなSGを変更してきていない、その中で新しい課題を吸収、ただどうしても難しい課題が出てきて、IoTに関しては、今回のSG20というのが途中の会期中に

設立されたSGでございまして、ですから、基本的には再編の中でも新しい課題を、少なくとも4年間のビューは持った上で全て吸収できる体制でなければ意味がないという視点で、ころころ変更すればいいものとは我々としては考えない、その上で、議長職とか、そういったもののかかなりのリソース提供になりますので、そこは腹を決めていくべきだとは思っております。

○梶原専門委員　ありがとうございます。

○山口通信規格課長　ちょっとさらに補足しますと、我々は今度のTSAGに寄書を入れていますが、その中で、フォーカスグループというものがどこのSGに位置づけられるかということも問うておまして、これはまさにフォーカスグループというのは今ホットなトピックを扱っているんで、これがどういう形で扱われるかというものも見直しの中では重要な観点だと思っているので、そういう形で意見しているところです。

○相田部会長　よろしいでしょうか。このSGの再編については、各SGでの議論を、あるいはAPTでの議論を踏まえて、国内では電気通信システム委員会のほうでご検討をいただくということになるかと思えますけど、ただいまのご質問に関連して言いますと、昨今の新しいテーマというのが来たときに、ややもするとSGの間で取り合いになっているように見えるようなことがあったということで、SG内で取り合いをし、あるテーマを検討するのにSGの間でリエゾンが返ってくるまで待つので検討がおくれるというような状況があるようであれば、それはやっぱりまとめる方向のほうがいいのかなと。その一方で、新しいSGVですか、その他をまとめたみたいに見えるというのは、これはあまり好ましいことではないのかなと。これは私の個人的な意見ですけれども、そこら辺、前田専門委員はよくご承知かと思えますので、よくご検討いただければと思います。

もう1件、先ほど手が挙がっていたかと思えます。よろしく願いいたします。

○藤本専門委員　資料の15-6の13ページの一番上に、5G時代のセキュリティということで、5G時代のセキュリティに注目していただいているというのはすごくいいと思うのですが、セキュリティはどうしても横串のところがありまして、特に5Gは、技術の使い方によって考えなければいけないセキュリティというのが非常に多様になってくるという意味では、あらゆる、例えば先ほどSG20でIoT、スマートシティの検討がされている、そういった中でもセキュリティを十分検討しなければいけないというような、それぞれに入ってくるようなものだというふうに思います。そういった意味で、連携の場の必要性というような形で出てきたのだと思うのですが、多いケースとして、S

G 1 7というセキュリティを検討する場があるので、そことの関係性が整理されないまま、誰かがセキュリティを考えてくれているというような流れができてくるというのはあまりよろしくないのではなかろうかというふうに思いますので、ぜひここで、せつかく5 G時代のセキュリティということで話題というか、トピックが注目されているところで、しっかり連携という形でもそれはいいかもしれないのですが、あらゆるユースケースでセキュリティが検討されるような体制をITUの中でもとっていただけるといいかなというふうに思います。よろしくお祈いします。

○相田部会長 これは、前田専門委員お祈いします。

○前田専門委員 セキュリティ、SG 1 7、お話のとおりでございまして、これは日本としても非常に重要なエキスパートで構成するSGでございまして、日本の現状のポジションは、さまざまなレイヤーとろんなアプリから下のレイヤー含めてセキュリティの要件が上がる中で、セキュリティのリソース、人材含めてばらばらにならないような形でまず体制を組んだ上で、今おっしゃられましたように、5 Gで単なる土管を太くするだけではなくて、タイムセンシティブとかまさに非常にセキュアが必要とする重要な情報を扱う中で、やっぱりレイヤーごとにろんな団体が、ある意味勝手なメカニズムを入れる中で、トータルでのセキュリティ・トラストは実現できているかという問題意識の提案だという認識で、SG 1 7含めた体制をどうあるかということと、その中で、そういったレイヤーの異なるアプリケーションに対するセキュリティをどう扱うかというのをSGのミッションとして明確にするということで議論していくものと考えております。

○相田部会長 ほかよろしゅうございましてでしょうか。

それでは。

○芹沢専門委員 すいません、話題が1つ戻ってしまっ申しわけないんですけど、先ほどの再編成に関してなんですけれども、再編成に伴った他国の意見というのは、多分今の時点であまり見えてきてはいないと思うんですけども、もし見えている部分があればどんなものがあるかということと、もう一つは、今回の再編に伴って、ITU-Tのろんなルールがこの再編に伴って変わる部分で主なものが何かあるかどうかというところがあればちょっと教えていただければと思います。よろしくお祈いします。

○相田部会長 これは事務局のほうでありますか。

○山口通信規格課長 後で前田専門委員にも補足いただければと思いますが、ちょっと再編の他国の意見については、現状ではまだ把握できていないです。TSAG会合の次回

会合があって初めて局長のほう、T局長のほうからご説明があるので、そういった場を使って他国の状況を把握したいと思っております。他方で、前回のW T S A - 1 6の会合等でも再編の議論はされておまして、やはりSG全体の構成が効率的な運用につながる、なるべく削減してほしいというのが私の承知している範囲では欧米等の考えではないのかなということもあって、そういう意味では、今回数だけは減った提案がT局長からされているのも、そういったことを踏まえた提案になっているのかなと思います。

それからあと、ITU-Tのルールとの関係は、我々もどのルールと関わるのか、特に関連する決議がございますので、そういった決議も一緒に考えていかないといけないと、すいません、今日の資料には入れていないんですけど、TSAGのほうの入力寄書には、関連する決議についても一緒に検討するべきだということをご日本寄書の中に入れてございますので、今後明確化していきたいと思っております。

○芹沢専門委員　ありがとうございます。

○相田部会長　よろしゅうございますか。

では、前田専門委員。

○前田専門委員　他国の情報は今、課長がおっしゃられたように、明確な情報はまだです。ただ、タイムフレームとして、次回2月のTSAGにおいては、全てのSGのマネジメントに対して、各SGが次会期に向けてどういう課題編成を変えたいのか、何に重きを置きたいのかというのを今、提案を2月までに出しなさいというフェーズですので、まずそれを踏まえた上で、国としてとか、再編は次のステップというのが段取りとしては正しいのかなと思っております、2月会合で幾つか情報は収集できるように努めたいと思っております。

○相田部会長　よろしゅうございますでしょうか。

(4) その他

○相田部会長　それでは、大分時間も過ぎてしまいましたので、議題4、その他ということに参りたいと思います。

事務局からご説明お願いいたします。

○山口通信規格課長　参考資料1をつけさせていただいています。

こちら、技術戦略委員会というNICTの次期中期計画だとか、あるいは次期の科学技

術基本計画の見直しなどを見据えた検討が技術戦略委員会というところで昨年の10月から開催しておりまして、来年夏ごろめにまとめていくんですけども、あわせて標準化戦略のワーキンググループも設置して検討を進めています。1ページめくっていただいたところに、検討項目等書かせていただいておりますけれども、先ほど前田委員からもご説明ありましたけれども、右上のところは、やはり標準化機関の活動そのものが大分変わってきている、目的、プロセス、スコープ、プレーヤーと変わってきていますので、そういう現状認識をしっかりとしたいということが目的と、それからその下以降は、実際に検討項目としてどういう形でどういう分野を標準化活動の領域として注力していくべきか、これは3ページの(1)のところ。(2)のところは、じゃ、その特徴や取り組みを生かした標準化機関をどう活用していくといいのかというような視点、それから、(3)のところは、推進方策として体制や支援策、それから(4)で標準化人材の確保と育成の方策という、こういったものをしっかりと、スケジュールのところをつけさせていただきますが、春ごろをめにまとめていきたいと思っています。

答申としては、技術戦略委員会の形で答申をあわせていただくということで、こういったことも踏まえながら、WTS Aに向けてまたITUをどう使っていくかというところにもインプットできればと思っておりますので、こういった取り組みもしておりますということをあわせてご紹介させていただきました。

以上でございます。

○相田部会長 ありがとうございます。

それでは、ただいまの2件のご説明につきまして、何かご質問、ご意見等ございますでしょうか。

○梶原専門委員 標準化戦略についてWGで議論しているということですがけれども、これはある程度まとまってきたときには、またこの場でご紹介いただけるという理解をしてよろしいでしょうか。

○山口通信規格課長 はい。また部会のタイミングでご紹介させていただきます。

○梶原専門委員 標準化の進め方のところで、今までと様子が変わってきているということに対して、この方々のメンバーで検討されているということですがけれども、例えば国研という中で深くかかわってくるとか、今まで通信系はメーカーというか、ベンダー側がわりとやっていたところもあったと思うんですけども、継続的なことをいろいろ考えたりしますと、国の研究機関とかがわりとどっぷり入ったほうがよいのかなと思ってみ

たり、先ほどの資料15-4でしたか、90名参加されたという、産官学のトータルの人数があったんですけれども、それがそれぞれの人たちが何名ずつなのかという中で、企業家が結構減ってきているのではないのかなと半分思いつつ、それをどういう形で補っていくのかとか、そういう観点も入っていくとよろしいのかなと思ってちょっとコメントさせていただきました。

○山口通信規格課長　ありがとうございました。そういう意味では、ITU-Tの中の量子の話なんかもそうなんですけども、先端技術分野での国研の役割というのも標準化の中で重要になってくるかなと思っておりますし、実際、今回の量子の関係の勧告が昨年でしたんですけども、非常にNICTの方の活躍が目覚ましかったというのがあって、そういう意味では、そういう視点、NICT、国研の役割というのもしっかり考えていきたいというふうに思っています。

○相田部会長　よろしゅうございますでしょうか。
ほかいかがでございましょうか。

閉　　会

○相田部会長　それでは、以上で事務局に用意いただいた議題は済んだかと思えますけれども、事務局から何かございますでしょうか。

○萩本国際情報分析官　次回のITU部会につきましては、WTSAの資料にありましたが、11月にWTSA-20が開催されます。それについての対処に答申いただくことになっておりますので、その前の9月か10月ごろに開催できればと考えております。また詳しい日程につきましては、部会長と調整の上、別途事務局でご案内差し上げます。その際にはご出席のほどお願いします。

○相田部会長　ありがとうございました。

全体を通じまして何か皆様のほうからございますでしょうか。

本日は予定の時間を大変超過いたしまして、申しわけございませんでした。しかし、SGの再編等々について、なかなか興味深い意見交換ができたのではないかと思います。

それでは、特にございませんようでしたら、第15回情報通信審議会情報通信技術分科会ITU部会、本日の会合はこれで閉会させていただきます。どうもありがとうございました。

